



同志社女子専門学校に学んだころ

——上野直蔵先生は京都のご出身でしたが、奥さんもお生まれは京都ですか。

上野 私は三重県の生まれなんですよ。

兄が京大へ入って、五人の姉妹も次々に京都の女専などに入るものですから、下宿代がたまらんいうことで、家じゅう京都へ移ってきたんです。

父は学問好きの地主で、子供の教育にも熱心でした。でも京都へ引っ越したために、戦後、不在地主だったので土地を二束三文で小作人に売らんなんことになって……。

上野久子さん

(上野直蔵元総長・理事長夫人)

に聞く

夫 上野直蔵のことなど

聞き手

河野 仁 昭

(社史資料室長)

——農地改革にひっかかったんですね。
上野 そうなんです。家は里でいまも管理してますけど。
——奥さんは同志社女学校へ進学なさったんですか。

上野 いえ、府一、京都府立第一高等学校です。いまの鴨沂高校。

——じゃあ同志社女専へ進学なさった？

上野 そうそう。当時は府一から同志社女専の英文科へ進学する人が、けっこう多

かったんですよ。

——同志社大学英文学科も卒業なさったんでしょう。

上野 私は英語や英文学が好きでしたから、やっぱり大学を卒業しておこうと思つて……。

——女専を卒業してから？

上野 そう。

——何年ですか、大学へ入られたのは。

上野 昭和十二年に入つて十五年に卒業しました。共学の大学いうても、女専を出て入るのは英文科ばかりで、法学部へ入る人なんていませんでしたよ。

——女専の英文科の学んだだけではあきたりなくて……。

上野 専門学校と大学のちがいのいうだけのことで、そういつちやなんだけど、女専の方がかえつて大学より英語をよく勉強できるようになっていました。共学の方はあんまり勉強に熱心というふうじゃなかった(笑)。それで不平をいうていたら、「大学は教えてもらうとこやない、自分で勉強するとこや。図書館があるやないか」いわれて(笑)。

——そうすると、女専の教育はいきとど



上野久子さん

いていて？

上野 ミッシヨナリーの先生が沢山いましてね。英文学のヒバード先生とか、音楽のクラブ先生とか。そこへもってきて有賀鉄太郎先生の世界史なんて、こんなごつい英語の原書で教へはって(笑)。結局十分の一ぐらいしか使わへんかったと思いますけど、その英語を学生に読まさはりましてね。ハンサムでダンディーな感じの先生で、ちよつと取っつきにくい感じでした。

——他の授業もやはり英語で……。

上野 そうでした。ミッシヨナリーの先生が入れ替わり立ち替わりで、英文学の標準的な作品をほとんど毎日一時間と、ほかに英作文とか英会話とかあって、一日に二時間か三時間は英語をしゃべってんなら

ような時間割でした。英語劇などもやりましたよ。

——やはりシェクスピアですか。

上野 そんなむずかしいのはようしませんから、私はアリス・イン・ワンダーランドの「On in a summer's day」というのかな、あれを毎年、みんな頑張つてやりました。それからクリスマス・ページェントがあつたりで、わりあいみんながまとまつてするような学部でした。

——校長先生は片桐哲先生ですね。

上野 そうでした。

同志社大学英文学科

——大学は女専のような授業ではなかったとおっしゃいましたね。

上野 そう。だからなんだか頼りなくて。でも、いい先生がおられたですよ、講師ですけど山本修二先生とか。

——演劇論ですか。

上野 私はあの先生のコースをとらなかつた。とつていたら大学がもつと面白かつただろうと思いますけど。それから石田憲次先生。京大から出向しておられて。フラ

ンス語では太宰施門先生。

——やはり京大ですね。

上野 そうでした。私、大学へ入つてはじめて太宰先生のフランス語のクラスへ出て、テキストを読まされてね。それから先生が、「君はフランス語ははじめてかね」と言われた。私は女専で三年間、宮川経輝さんのお嬢さんからフランス語を習つていたんですよ。すっかり恐縮してしまつて(笑)。太宰先生に習つたテキストは今も忘れません。だれかの回想録で、大変面白かつたんです。太宰先生ご自身もとても面白い方で。

——そうですね、そんな方とは知りませんでした。文人学者というイメージはありますけど。

上野 よく太つた方でした。のちにお家が火事になって、二階で寝ておられて焼け死にされました。

——だから余計に思い出ぶかいのかもしれませんね。

上野 そうでしょう、きつと。

——上野直蔵先生も英文学科におられたわけでしょう。

上野 いました。あの人が英文学科をり

ードして、みんなの世話をして。それから
舟橋先生。

——舟橋雄先生ですね。確か青山学院の
ご卒業で……。

上野 アメリカで苦学して帰ってこれら
た方で、うちの主人が同志社へ呼びし
たようです。

——ああ、そうですね。なんでも大学は
図書館が充実していなければ駄目だと、英
文学科の図書室だったか、大学図書館だっ
たか、英文学関係の図書の購入につとめ
れたとか。

上野 そうかもしれません。それから勝
田（孝興）という先生がおられました。ア
イルランド文学をやっておられて、学生の
評判はあまりよくなかったけど（笑）。セリ
フなど朗読はお上手でしたよ。

——奥さんが専攻されたのは、どうい
う領域ですか。

上野 私は古代英語のほうでした。
——へえッ、むずかしかったでしょうに。

上野 わりあい人間が単純なので（笑）。
古代英語のああいふ思い詰めたような、そ
のくせ単純なような内容が好きだったん
ですね。

——そうですね、私は門外漢なんで。

上野 何か素朴で、力強うて、思い詰
てね。中世文学も好きなんですよ、何か非
常に熾烈というか、インテンスというか。



大学時代の上野久子さん

言葉の美しさ

——英語という外国語がお好きだったよ
うですね。

上野 私、音楽は全然だめで、ストーリ
ーを読むのが好きでした。学生のころは英
語で書いたストーリーをむちゃくちゃ読み
ましてね、一日に百ページぐらい読みまし
た。好きだったんです。自慢するようでお
かしいけど、英語はわりあい苦勞せずに頭
に入りましたから、府一の五年生のときに
は、シャーロック・ホームズなどもう原文
で読んでいました。

——よくは知りませんが、あれむずか
しい文章なんでしょう。

上野 むずかしいんです。でも女学校の
とき読んでいました。英語で書いたストー
リーが好きで、よく読んできましたから、
言葉の音がいまでも気になります。

——日本語でも？

上野 そうですね、変な日本語を使われ
る気になります。近頃は「犬に餌をあ
げる」って平気でいうでしょう、なんで犬
に「あげる」のか（笑）。

——なるほど、確かにそうですね、「お犬
様」だ（笑）。

上野 初めて聖公会のマリア教会へ行っ
て、英語の祈禱書を読んでいたら、本当に
美しいので雷に打たれたような気がして。
それで組合教会から聖公会へ変わったん
ですよ（笑）。

——言葉の美しさでねえ。珍しい変わ
り方ですねえ。

上野 私の友達に、カトリックの司祭さ
んとこへ行ったら、アイスクリームなどが
とてもおいしかったというので、皆にそれ
で入信したんだろうと冷やかされている人
がいます（笑）。

——お互いユニークで結構です(笑)。初めてうかがう話ですが、はじめにした感じがなくていいですね。それはそうと、聖公会の祈禱書には英語もあるんですか、私は日本語のしか知りませんでした。

上野 英語礼拝がその教会にはありまして、朝八時から。

——なるほど。

上野 でも、近ごろはむかしのええ英語を普通の英語に直すでしょう。だから勘狂うというか、気が乗らんというか……。

——日本語もそうですね、苦心して訳された先生方には悪いけど、新しい聖書の訳文は私は困るんです。朗読に耐える訳とは言いがたいですね。言葉の品格がない。まあ、意味はたぶんそれでいいんでしょうが。

上野 そうです、文の荘厳さというものがないでしょう。それに、正餐式の時、「これは我が血なり」というのはまだましで、「これは私の血ですよ」なんて言われると、なんやオカルトみたいで(笑)。こう言う悪いけど。

——それとやはり文章としての美しさがほしいですね、コミニケーションの役割が果たせたらいいじゃないかと割り切れませ

んね。日常会話ならともかく……。

上野 英語の祈禱書でも、たとえば「It is meet and right so to do」というと、顔がきちんとなってますでしょう。それを「It is suitable and right」というふうにとると、うまく朗読できませんよね、リズムがね。

——唱える文章ではなくなっている。

上野 内容がわかったらええようなものやけど、それで十分とはいえませんか。

——言葉にリズムが伴っていないから、詩もそうなんです、島崎藤村と上田敏とか、明治の詩は朗読しても響きがいいんです。しかし現代の詩は、朗読して耳に快くない。声に出して読まれることを念頭に置いて書かれていないんです。黙読するものになった。外国の詩の翻訳もそうなんです。原作が書かれた時代のいかに問わず直訳で。直訳というのは文学の文章じゃないですね。

心を訳す通訳

上野 通訳も直訳ではだめなんです。

——通訳といえば、私はこの『同志社時報』の前号(九十八号)で、社会福祉学の

大塚達雄先生にお話をうかがったんですが、そのとき、ドロシー・デッソー先生の授業の通訳を上野夫人がやられて、「これがなかなかの名通訳で、京都弁でやるわけですよ」といわれまして、「へえッ、京都弁で？」(笑)。

上野 私は自分の通訳理論を持っていますね。直訳じゃない、やっぱり心を訳さなきゃいけないという気持ちがありますから。

——なるほど、心を訳す。いいですね。

上野 通訳というのは、読んで理解するものじゃなくて、耳から入るものでしょう。だから耳から入るにはできるだけいい日本語、わかりよい日本語でなければいけない。そういう日本語を蚤が糸を吐くように吐いていかんなんと思ってるんですけど。

——翻訳も基本的にはそうなんですけどね。デッソー先生とは早知からのお知り合いです……。

上野 アメリカ文化センターで、ドクター・スースという当時有名だった漫画家の通訳をしたんです。そのとき聴衆の中にデッソー先生がいたわけなんです。その翌日、先生が来はって、「私のために働いてくれま

せんか」といわれましてね。「私は英文学は好きやけど、社会事業についてはよく知りません」といったんです。でも、折角頼みに来てくださったことでもあるし、「まア、しょうがないわ」いうて。それから三、四十年もあの方とおつきあいすることになったんですよ。

——デッソー先生にほれこまれたわけですね。

上野 とにかく長いおつきあいでした。——デッソー先生は亡くなられましたけど、今も通訳のお仕事を……。

上野 私の守備範囲というのは、精神医学と社会。カウンセリングとか臨床心理、医学などのことは、専門的なことはあまりわかりませんけど。精神医学と美術、美術については長いこと通訳したんです。今はポートアイランドの中にある非常に新しい実験的な音響、なんとかサウンド・アーティストというんですよ、そういう人たちが来たときデイスカッションの通訳をします。面白いですよ。

——実験的なサウンド？ どんなことしはるんですか。楽譜はあるんですか。

上野 楽譜によらないんです。糸を張っ

て手でこすって音を出したり、小さな電池で一定の音波を出しましてね、これをたくさん通じておくと、共鳴しあっているような音が出るとか。そういう新しいことをやっているホールがあるんです。神戸のポートアイランドに。

——奥さんは音楽もやられるんですか。

上野 私は音楽は全然だめやけど、そういう音楽ならできるんです(笑)。

——きつと脳が柔らかくてできているんですね(笑)。私などジャズでさえついでいきかねていますから。

上野 そのダイレクターとわりあい仲よしになつて、そういうことをする外国人が来ると私にいうてきはるんです。私、デイスカッションの通訳するの、わりあい好きです。

——そうですか、むずかしそうに思いますけど。

上野 この人はこう言おうと思っているんだなということをキャッチして、あちらの人に伝える。その人がきちっとポイントを突いた答えをしてくれると、私のほうも満足感があります。そういうことがうまくいかないと折角こられた人に気の毒だか

ら、「デイスカッションなら私にさせてください」とお願いしたりして。

志士の気負い

——ところで、ご結婚なさったのはいつですか。

上野 昭和十五年。

——じゃア、大学を卒業されてすぐ。

上野 そうです。

——奥さんから見られて、上野直蔵という方はどういいう方ですか。

上野 最後の十年というのは、ほんとうに天国でした。

——どういいうことでしょうか？

上野 気がやさしくて、非常にデリケートで。そして、私と本当にツーカーで、なにもいわなくても、お互いに言おうとしていることがわかりあえるんです。それから、二人とも明治文学が好きでしたから、たとえば夏目漱石の「智に働けば角が立つ」などという一節を、なにかの拍子に私が申しますと、「情に流されてもあかんわな」と、うまいこと受け止める。なにかにつけそんな調子でした。

—— 年季を積んだ万才コンビいうたら失礼ですけど(笑)。ちょっとそんな感じで……。

上野 落語に「野ざらし」というのがあるでしょう。主人がたとえば卒業式のスピーチの原稿を書いて、「一ぺん聞いてくれ」いうんです。聞き終って私が「それは野ざらしですね」というの。「ああそうか、これ野ざらしか」と、主人がね。「野ざらし」いうと、何べんも聞いたありきたりの話という意味で、それがちゃんとわかるから、二人でしゃべるのがたいへん面白いんです。ユーモアもあって。

—— いいご夫婦ですね。ユーモアとかウィットなど。日本人の会話には普通乏しいですから余計にね。夫婦となればなおのことで。

上野 ただ、やっぱり明治の人でしたから、国事に奔走する志士みたいな気取りがありましてね、家の者などほとときやいいというようなところがあって、家族が困っていても、実際には派手にお金を使いましたね。私もまたむかしのしつけを受けていたせいか、そんなことあまり気にしませんでしたから、喧嘩してでも金をよこさせよ

うなんて考えもつかないんですよ。黙って辛抱しているというような感じで。しんどかったですね。

—— それは上野先生がお若いときでしょう。

上野 そうです、年寄りになってからだんだんましになりました。大学長をしていた間はまだ苦しかったですよ。あの人が大学長をやめて広島大学へ行ったら、信じられないほど家計が楽になって(笑)。

—— 同社社の給料が安かったか、交際費がいらなくなったか、どちらかでしょう。

上野 私の知らない出費がいつぱいあったみたいで、なんとも(笑)。とにかく浪費家なんです。こんなん始末していたら家が何軒も建っていたわねというて(笑)。

—— 家など借家で結構というお考えでしょう。

上野 そうでした。一度、山科にいい土地があるから買って家を建てないかという話があったときも、「山科から通うなんて嫌や」言いましたね。そのくせ、たとえば歯などには惜しまずに何百万円でもお金を入れるんですよ。「総入れ歯だとアイデアが十分わいてこない」と言いましたね。「むかし

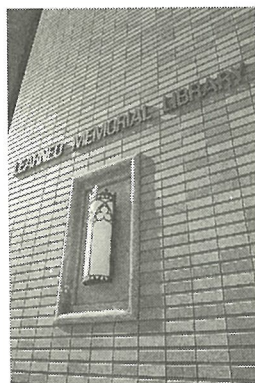
は人としやべっていても、自分の歯でしゃべっていたからアイデアや言葉が面白いほど出てきた。入れ歯になったらそれほど出てこない」

—— そうですか、味についてはわかりませんが、私も歯を入れてますから。

上野 そういつていました。だから私、「入れ歯にしてセーブしたほうが、かえっていいんじゃないの」といったりして(笑)。でも晩年はもう家でも気が弱くなって、孫に対してもなにか気が弱くて。疲れて帰ってきて、黙ってテレビで相撲など見ているんです。私もそばに座って一緒に黙って見ているのが嬉しかったですね。何もものをいわんでもお互いにわかりますしね。

ただ、私より先にこの人が死ぬということとはわかっていましたから、それが心の底で本当に痛かったですね。いまはもうそういう悪いことが起こってしまいましたから、痛くないですけど。

—— いつまでも痛がつておられたら、こんな話もできやしませんから(笑)。



ラーネッド記念図書館
(田辺キャンパス)

田辺校地利用のこと

——さつき、志士の気取りというか気負いというか、そういうお話がありましたけど、それは結局、公事に奔走して家を顧みないということなんでしょうが、本当にまあ同志社のことにも最後までよく尽されたから、そういわれてみるとわかりますね。

上野 同志社のことについても、ああしたらい、こうしたらいいと、いろんなアイデアがうかぶんだと思うんです。だから私、主人は同志社の総長になりたかったんやろと思いますよ。総長になってああもしたい、こうもしたいという思うところがあつて。

——なるほどね。

上野 死ぬときでも、田辺のことばっかりうわ言に言いましたね、「これで十三票です、これで成立しました」とか、うわ言でいうんです、理事会で採決する夢を見ていたんでしょう。それから「いま事務長に案内させますから」とか。夢は田辺をさまよっているんです。田辺のうわ言ばかりいうて死にました。

——そうですね、そんなにまで……。せめて起工式まで生きていていただきたかったですね。

上野 起工式は主人が死んだ次の年の冬で、私よばれました。まア、あれほど同志社の仕事が好きやった人も珍しいでしょうね、私のことなんて全然心配せんと（笑）。なんとかするやろというふうで。

——田辺校地のことに限りませんけど、特に田辺校地については、同志社の者は上野先生のご功績を忘れることはないでしょう。私はそう思います。

抜群の記憶力

——奥さんさきほど、卒業式の式辞を上

野先生は読んで聞かされたといわれましたね。

上野 そうだったんです。なんでも春に十三回ぐらい式辞をいわんならんかったらしいんです。ところが、同じ式辞をいうのは嫌やいうて、十三回自分できつくるんです、えらい苦労していました。

——そうですね、私は即席の式辞かと思つて聞いていたんです。全く型にはまらない、アドリブというのか、即興的な感じの部分がとても多いんです。

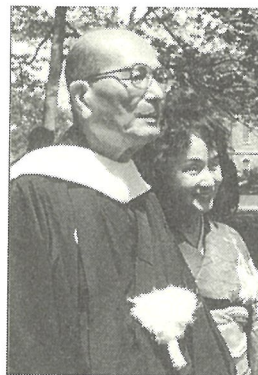
上野 それはよかった。私も型にはまったのは嫌いですから。

——しかも、書いたものを見ないでいわれるから、つきり即席だろうと。そんなに苦勞なさつて準備しておられたとは思つてもみませんでした。書いたものを見ずにいつておられたのは、記憶力がよかったからですね。

上野 記憶力はすごかったです。

——おうちで暗唱して憶えるとか。

上野 いいえ、そんなことは全然。主人の一族はずいぶん頭がよかつたようです。主人のお姉さんは九十いくつで亡くなりましたけど、亡くなられるまで京都の古い



米国アーモスト大学より
名誉文化博士の学位受領

絵具商の女主人をやっているままでね、絵描きさんが来はると、先生の絵はどこそこで見せていただきましたけど、今年はこういうのをおかきやしたんですか」などというて、すごい記憶力でした。

——すると先天的なものがかなりあったんですね、特別の記憶術とかではなくて。同志社墓地の中に共葬墓地というのがあって、毎年四月（もとは一月、新島永眠の日）に四、五人の方の分骨と一緒に埋葬されるんですが、上野総長はそのすべての故人の略歴を、なにも見られずに参列者に紹介されるんです。あの記憶力に私は驚きました。「一九何十年昭和何年……」というふうのにのべられるんですから。

上野 結婚式での花婿、花嫁の紹介もそうでした。何も見ないで由で言いました。算盤がすぐよくできてましてね、「頭の中に

数字が算盤のかたちで入ってしまう」というてましたよ。

——奥さんは算盤のほうは……。

上野 全然。私は算数音痴で（笑）。主人からそういうわれました。

教え子に慕われた夫

——上野先生のことで思い出しますのは、記憶力の非凡さと、教え子、お弟子さんといえいいか、そういう方たちからすぐ慕われていたことです。あれはなぜだと奥さんはみていらつしやいますか。

上野 家のことほつたらかして教え子と食事してましたもの（笑）。

——それだけではないでしょう。

上野 一生懸命その人のいうことを聞いて、一生懸命その人のために就職のお世話などしてましたから。その人の長所を見抜く力が非常にありましたね。いろんなところへ顔を広めておいて、「君はここがい」と弟子をはめこんでいきました。

——世話好きな面がありました。で。お顔も広がったし。交際上手だったんでしょうか。

上野 親分肌というか。とにかく弟子の方たちのほうが私より主人のことよう知ってはりまして（笑）、「ヘー、そんなことあったん」いうて。お金づかいが荒かったですしねえ。私、思うんですけど、人のなかにはちよつと始末なつきあいをしなから、心がゆつたりとしている人つてあるでしょう。

——心がゆつたりしているかどうかはともかく、いますね。

上野 そういうつきあい方をしてご自身の独立性も保つて。ところが主人をみていますと、それだけでは満足できないんですよ。身銭を切つて何かしてあげないと心が楽にならないようで。そういうことをしないと心が自由にならんのか、やたら、もうかませんわいう気になって、いうても直らんのか、やからと思つて。私はいわんことにしました。

——奥さんがもしやかましくいつておられたら、お弟子さんたちがお家へ出入りされることもなかったでしょうね、きっと。私はそう思います。それから、上野先生はすごく人情家だったでしょう。私は二、三そういう面のエピソードを存じ上げている



遺影の前で

敵にしたら非常に怖いけど、味方にしたら非常に頼もしい、そういう人だったと、私も思います。総長としても立派だったと思っています。

——本当にそうです。接しているうちにとてもやさしい方だと分ってきました。

上野 河野さんのことは、主人が高う評価していました、「河野という人を発見したんや」と自慢そうに言っていましたね。

——へえッ、そうですか。

上野 主人、なにも言いませんでしたか。
——はい。

上野 あら、いやだ。

——もしそうだったとしても、直接いわれたらかないませんよ(笑)。でも、目をかけていただいて、本当に有難かったです。

趣味のことなど

——亡くなられるまで田辺のことをうわ言にいわれるほどお仕事一途の方で、志士のような面があったと、さっき奥さんいわれましたけど、上野先生にはご趣味はなかつたんですか。

上野 これといつてなかったですねえ。

テレビで相撲を観るくらいで。

——相撲が大好きでしたね。花も好きだったのとちがいますか。

上野 花も好きでした。日本のなにげない花がね。総長になってから、大学のキャンパスに自分の好きな花をめちゃめちゃに植えさせたんとちがいますか。そういう話を聞きましたけど。

——めっちゃめちゃかどうか、花を植えさせしたのは確かです。梅とか山茶花とか。それから良心碑のあたりに季節の花など。

上野 そうだったそうですね。

——あるとき、「河野さん、新島先生の漢詩の『庭上の一寒梅』というのは、白梅ですか紅梅ですか」といわれたので、「確かにことは分りませんが、イメージとしては白梅だと思います。それに紅梅より早く咲くように思います」とお答えしたんです。そしたら、「やつぱりそうでしょうな、紅梅を沢山キャンパスに植えてるのは、あれは問題や」と独り言のようにいわれて。
上野 私などにも、「栄光館の前のダグウッドがいま真っ盛りや、見てきたらどうや」なんていつてくれたりしました。

んです。

上野 確かに情にもろかったですね。テレビで漱石の「坊っちゃん」を観ていまして、うらなり先生だったか、かわいそうやいうて涙を流しているんです。「あんな、ばかじゃない」(笑)。私そういつて。

——そうですか、そんな面が……。ちょっと怖いような感じがする先生でしたけど。

上野 怖いという感じがしたようですね、ほかの方からもうかがいましたけど。



上野邸（滋賀県近江舞子）

——キャンパス花便りですね（笑）。それはそうと、このお住い（近江舞子浜）はいいですね、ちよつとご不便でしょうけど。
上野 これ、高山（義三）市長の別荘だったんです、勧めてくださる方がいましてね。主人は自分の家などいらんという主義でしたけど、物を置く場所がなくては困るから、買ったんです。

——屋根はいまどき珍しい藁葺きだし。

でも、寂しくないですか。

上野 最初はちよつとそう思いましたけど、慣れたらそんなことないですよ。健康にもよろしいですしね。

——比良連峰がきれいですねえ、まだら雪が残っているし、確かにいい所ですね。

上野 買い物は散歩を兼ねて二キロほど歩くんですよ、眺めもいいし、健康にもいいから、ちよつとも気になりません。

——今日は本当に長時間、とてもいいお話を有難うございました。通訳とか時事英語教室とか、インド舞踊もなさっているとかうかがいましたが、けっこうお忙しいしておられる様子で。どうぞ今後もお元気で活躍くださいますように。

上野 主人によく聞かされていた方ですので、一度ゆつくりお会いしたいとかねがね思っていました。

——どうも有難うございました。

